

# ドイツ語圏の民間伝承と観光

## —食文化・食養生・自然療法の事例から—

German Folklore and Tourism:  
Food Culture, Medicinal Foods and Natural Therapy—Case Studies—

植 朗子  
Akiko UE

### I はじめに

ドイツ語圏の古い伝承に「ゲルマン German」の語源として「germinare=発芽する」という語が示されている。グリム兄弟<sup>1)</sup>によって編纂された『ドイツ伝説集』*Deutsche Sagen*の第408話目「ザクセン人の起源」には、ドイツ人あるいはザクセン人が樹木に果実のように実り誕生したという伝説が紹介されている。そして、この話以外にもドイツ語圏には植物にちなんだ神話的伝承、メルヒェン、伝説が数多くあり、それらの一部は観光資源としても活用されてきた。ドイツ語圏はキリスト教化以前は、泉、岩そして樹木への古代信仰があり、そのため観光地にはこれらの要素を含む場所が多くみられる。

古い植物伝承はあくまでも物語上のものであり、現代においては植物の奇跡や不思議が信じられているわけではない。ドイツ語圏の文化的記憶の一部として、迷信・昔話として語られているにすぎない。しかし、それらの物語はそれぞれの地域で継承されている古い習俗、食文化、食養生、祭などと結びつき、現代の「スピリチュアルツーリズム（トラベル）」や「ウェルネスツーリズム（トラベル）」の人気を下支えしている側面もみられる。観光の目的として、心の充足のために宗教的名勝地を訪れる人もおり、ゲルマン神話をはじめとする神話的伝承の記録を数多くもつドイツ語圏はスピリチュアル好みの人たちにとっても格好の場所ともいえよう。

「スピリチュアルツーリズム（トラベル）」と「ウェルネスツーリズム（トラベル）」の定義を確認すると、「スピリチュアルツーリズム（トラベル）」とは宗教上の聖地への観光を意味するものである。神社仏閣、霊峰など聖地の観光地化は日本にもあり、現代におい

---

<sup>1</sup> Brüder Grimm : *Deutsche Sagen*. Nachdruck der 1. Auflage 1816 und 1818. Hrsg. von Heinz Rölleke. Frankfurt a.M. 1994, S.451.

<sup>2</sup> Brüder Grimm (兄ヤーコプ Jacob Grimm 1785-1863、弟ヴィルヘルム Wilhelm Grimm 1786-1859)

て世界各地<sup>3</sup>で散見される。そして、健康をテーマとする観光のうち、患者が居住地以外の医療機関で医学的治療を受けるものを「医療ツーリズム」と呼び、「ウェルネスツーリズム」（あるいは「医療ウェルネス」）とは医療施設以外で健康増進を目的とするサービスを楽しむための旅行<sup>4</sup>を意味している。

では「スピリチュアルツーリズム」の場として紹介される宗教的観光地、「ウェルネスツーリズム」の場に含まれる自然療法（植物療法）施設において、神話的伝承はどのように語られているのか。またどの時代の、こういった内容の伝承が観光地の宣伝に活用されているのだろうか。本稿ではドイツ語圏の観光地における（1）宗教的施設と植物奇譚、（2）食養生と観光食文化に活用される植物、（3）植物療法・自然療法をめぐる観光地と伝承、との関係性について明らかにしたい。

## II ドイツ語圏の観光トピックと伝承

### 2.1 ドイツ観光局による観光トピック

ここでドイツ観光局の観光検索用のトピック<sup>5</sup>を確認する。トピックは「都市と文化」「レクリエーション」「スペシャル」の3つに大別され、さらに項目が細分化されている。その中には重複された内容もあり、ホームページ閲覧者の関心にそった検索キーワードによって、観光地紹介の内容を見ることができる。項目は以下の通り<sup>6</sup>で、植物にまつわる伝承や言い伝えと関連が見られるものについては下線で記した。

#### （1）都市と文化

①都市、②ユネスコ世界遺産、③Shopping、④ミュージアム、⑤宮殿・庭園・公園、⑥音楽&ショー、⑦食べ物と飲み物、⑧伝統&習慣、⑨TOP 100、⑩Learning German

#### （2）レクリエーション

①自然風景地、②ハイキング、③ドイツの島、④健康とウェルネス、⑤サイクリング、⑥観光街道、⑦Spiritual travel

<sup>3</sup> 池田一城「聖地の観光地化とマス・ツーリズム—高野山における交通の発達に伴う聖地空間の再編と役割の変化」『観光研究』(Vol. 26・No. 2)、日本観光研究学会、2015年3月、p. 61。「宗教上の聖地の観光地化は、世界中で散見される現象である。近代以降における観光産業の隆盛は、国内観光を飛び越えて、今や世界中の地域が観光の対象となっている。」とある。日本では宗教上の聖地として、おもに神社や寺院、そのほか修験道に關係する修行場などが挙げられる。

<sup>4</sup> 穂鷹知美「ヨーロッパに押し寄せる「医療ツーリズム」と「医療ウェルネス」の波 ～ホテル化する医療施設と医療施設化するホテル」一般社団法人日本ネット輸出入協会ホームページ、2017年6月25日記事（最終閲覧日2020年1月19日）<https://jneia.org/170625-2/>

<sup>5</sup> ドイツ観光局公式ホームページ <https://www.germany.travel/jp/index.html>

ドイツ観光局の検索トピックは変更になる場合がある。例えば記念式典や催事としてのイベントが開催期間をすぎると別の項目へ変更になる。（最終閲覧日：2020年2月10日）

<sup>6</sup> このほかには、「ビジネストラベル」、「イベント」、「バリアフリー旅行」、「サステイナブルツーリズム」などでも検索できるようになっている。カタカナ表記と英語表記については、ドイツ観光局の日本語ページに掲載されているまま表記した。なお、ドイツ観光協会のページには、日本語ページがない箇所もあり、それらについてはドイツ語・英語のページを参照している。その和訳は論者が作成した。

### (3) スペシャル

①自動車の国、②Medicine、③クリエイティブ、④クリスマスマーケット、⑤テーマパーク⑥Luther

ドイツ観光局ホームページは「スピリチュアルトラベル Spiritual travel」の項目がある点特徴的である。日本で「スピリチュアル」というと、開運のための場所、パワースポットなど霊的な場といった根拠が不明なもの、寺院・神社など宗教施設として認められているものが混在する。ドイツ観光局は「スピリチュアルトラベル」の紹介として以下のような文を掲載している。

旅に出るためには、厚い信仰が必要というわけではない。今日のスピリチュアルな旅は、自分自身の内面に向かうものである。教会、修道院、神秘的な場所、巡礼地ルートへの旅といった、印象深く、インスピレーションを与えるような未知の場所がドイツにはたくさんある。<sup>7</sup>

ドイツ観光局の述べる「スピリチュアルトラベル」の「スピリチュアル」は、精神的なもの、霊的なものを指し、観光客の信教と必ずしも一致する必要はないという。文化的、民俗学的、歴史的関心、あるいは景観への興味などが、その宗教的場から刺激を受ける範囲を想定している。ドイツ観光局が示す「スピリチュアルトラベル」の地には、キリスト教関連やユダヤ教関連の観光地のほか、ハールツ山地の魔女集会<sup>8</sup>や巨岩伝承の地など迷信・俗信的なもの、古代宗教的な場所も見られる。そして、これらの観光地の紹介文には、民間信仰、古代のゲルマン信仰と関連するそれらの観光資源が、人々の運氣や健康に直接的に作用するというような含みはもたせていない。健康増進を旅の目的とする場合は「健康とウェルネス」の項目にある医療的根拠のある自然療法施設<sup>9</sup>を勧めており、「ウェルネスツーリズム」と「スピリチュアルトラベル」を混同<sup>10</sup>しないドイツ観光局の姿勢が確認できる。

<sup>7</sup> この「スピリチュアルトラベル」の項目には日本語ページがないため、ドイツ語ページから論者が和訳を作成している。

<https://www.germany.travel/de/freizeit-erholung/spirituelles-reisen/spirituelles-reisen.html> (最終閲覧日 2020年2月10日)

<sup>8</sup> ハールツ山はドイツ観光局の「ハイキング」のトピックでも紹介されている。なおドイツ語と英語のページはあるが、この項目については日本語のページは2020年2月10日段階では作成されていない。

<https://www.germany.travel/de/freizeit-erholung/wandern/harzer-hexen-stieg.html> (最終閲覧日 2020年2月10日)

<sup>9</sup> 治療を目的とする「医療ツーリズム」の紹介については、「スペシャル」の項目にある「Medicine」に詳細が掲載されている。

<sup>10</sup> 日本のテレビ番組でも紹介されたドイツ・ノルデナウの泉は、「奇跡の水」として癌治療や脳腫瘍、白血病治療に効果があると宣伝された。しかし、その後の水質検査では特別な成分は発見されず、医学的根拠は示されていない。ドイツ観光局のHP等、公式なものではノルデナウの泉の効能について語ったものはない。民間の健康食品をとりあつかうところでは、ノルデナウの泉から採取された水が高値で販売されるなどの事例が見られる。

<http://www.naruhodo-genki.com/nordenau.html> (最終閲覧日：2020年3月1日)

「ユネスコ世界遺産」のトピックには、カール大帝の墓所であるアーヘン大聖堂をはじめ、ケルン大聖堂やゴスラー歴史地区など『ドイツ伝説集』に登場する歴史的観光地が紹介されている。ドイツでユネスコ世界遺産登録されている46箇所のうち、植物伝承と関連するものにはヒルデスハイム大聖堂、薬草医学との結びつきがあるヘッセン州のロルシュ修道院がある。「観光街道」のトピックにはドイツメルヘン街道があり、グリム兄弟の『グリム童話集』の舞台となった名所が紹介されている。また、ドイツの伝統食で伝説との関係が見られるものとしては、南ドイツのマウルタッシェンがある。「健康とウェルネス」のトピックには、ドイツの温泉地とそこに併設されている自然療法施設の紹介、そこで提供される健康的な食事が掲載されている。観光地に関するこれらのトピックの詳細についてはⅢ章以降に論じることとする。

## 2.2 オーストリア政府観光局による観光トピック

オーストリア政府観光局の公式ホームページ<sup>11</sup>には、トップページに「オーストリアで休暇を過ごすために役立つ基本情報から観光スポット、自然、歴史、文化、食、イベント、お勧めのアクティビティなど、おもしろい情報が満載です。」との記載がある。旅のテーマ・アクティビティとして、①芸術と文化、②ハイキングとアルプス、③食の楽しみ、④周遊・日帰りの旅、⑤自然を楽しむ休暇、⑥保養とウェルネス、の6つに分かれている。

「芸術と文化」のトピックにオーストリアの祭りの年間カレンダーがある。1月5・6日にザンクト・ヨハンなどザルツブルグ州ポンガウ、ピンツガウ地方で開催される「ペルヒテンラウフェン Perchtenlaufen」（ペルヒタの巡回、の意）の祭りは「春を象徴する美しいペルヒテンと冬を象徴する怪異なペルヒテンの仮装パレード」と紹介されている。また12月5・6日にブライテンバッハの「ペルヒテンシュプリングェン Perchtenspringen」（ペルヒタの躍動、の意）があるが、これは「西洋版のナマハゲ」と説明がある。なおペルヒタとはドイツ語圏の穀物神のひとつで、植物の生長を司る女神である。ペルヒタ伝説はオーストリア国内他にドイツ語圏の各地に数多く存在し、「ペルヒタ」が訛った方言の呼び名も多数ある。ペルヒタ伝説から派生した地方祭りは、植物が発芽し生育する気候を穀物神と結びつけたもので、豊穰・多産・女性の守護・子どもの育成にまつわる。

ほかにオーストリア政府観光局のウェルネスツーリズムに関する項目を確認すると、ドイツ観光局のそれと異なるのは、「保養とウェルネス」の検索部分に、健康にまつわる神話的伝承地が掲載されている点である。Ⅲ章で詳細を論じるが、温泉などの自然療法のための施設に迷信との関連がひとめでわかる項目が紹介されているのは特徴的である。「健康」と迷信的な「伝承」と結びつけた事例であり、いわゆる「民間療法の由緒」を語る物語がその地の観光に彩りをそえている。

---

<sup>11</sup> オーストリア政府観光局公式ホームページ <https://www.austria.info/jp>（最終閲覧日 2020年2月10日）

### III ドイツ語圏の民間伝承と観光食文化・食養生とウェルネスツーリズム

#### 3.1 シュヴァーベン地方「マウルタッシェン」

南ドイツの地方料理として日本のガイドブックにも紹介されている料理のひとつに「マウルタッシェン」がある。

シュヴァーベン地方の名物料理、マウルタッシェンの誕生にまつわる伝説は数多くあります。その中の1つに、マウルタッシェンの「マウル」はマウルブロン修道院に由来し、そこのシトー会修道士たちが断食節にも肉を絶つことができず、神の目を盗むためにこの禁じられた食べ物を生地で作った袋の中にすばやく隠したという説があります。そのため、マウルタッシェンは俗名「神様へのペテン」とも呼ばれています。

12

このドイツ観光局による「マウルタッシェン」の説明によると、マウルブロン修道院の名称から「マウル」が名付けられたとされている。しかし、この「マウルタッシェン」の名称については、ケルンテン公爵でありチロルの伯爵ハインリヒの娘マルガレーテ・マウルタッシュという人物にちなんだ別の説がある。

マルガレーテはこの城で厳しく税を取り立てたため、イタリアの商人たちからは城をマラ・タスカ（悪しき銭袋）と呼びならわした。それがドイツ語に入りなまってマウルタッシュと変わり、マルガレーテのあだ名になったという。なおマウルタッシュは古くはマウルタッシェ（マウル+タッシェ）と書かれ、タッシェはイタリア語のタスカと語源を同じくしており、今日共に単なる袋の意であるが元来は報酬を入れる銭袋を意味した。（略）マウルタッシュとは今日ではシュヴァーベン地方（ドイツ南西部）の料理の名である。<sup>13</sup>

このようにマウル（=口）+タッシェ（=一撃）、そしてタッシェから転じたタッシュ（=袋）のふたつの語源が示されている。ドイツの地方料理として有名な「マウルタッシェン」の紹介に、マルガレーテの伝承が紹介されなくなったのはなぜか。

チロル地方やケルンテン地方では、人々が徘徊する幽霊マルガレーテ・マウルタッシェの話について語ってくれる。マルガレーテはかつてその地方の領主で、とても大きな口（マウル Maul）だったため、「マウルタッシェ（=大口）」と呼ばれていた。<sup>14</sup>

<sup>12</sup> 「マウルタッシェン」に関するドイツ観光局の紹介ページ。

<https://www.germany.travel/jp/towns-cities-culture/food-drink/traditional-german-cuisine/maultaschen-swabian-ravioli.html>（最終閲覧日 2020年2月10日）

<sup>13</sup> 桜沢正勝・鍛冶哲郎訳『グリム ドイツ伝説集』（下巻）人文書院、1990年、p.346。

<sup>14</sup> *Deutsche Sagen*, S.564.

マルガレーテ・マウルタッシェは死後、オスターヴィック城、ディートリヒシュタイン城などに出没し、その古城周辺の牧草を喰む牛や羊たちに鞭をふるったという。マルガレーテに関する伝説は戦や地方政治にまつわる荒々しい内容ばかりで、名物料理の名称としてそれを語り継ぐには血なまぐさい。よって、現在ドイツ観光局が紹介している「修道士たちが好んで食べた美味しい料理」というエピソードが選ばれたと思われる。料理としての「マウルタッシェン」は袋状にした小麦粉の皮にホウレン草、パセリ、たまねぎ、ひき肉を入れたものであり、料理名はこの料理の「袋」の見た目に関連しているともいえる。

ドイツの地方名物料理に複数の伝説が関わっているこの事例は、食文化の継承のためにも有意義で、民俗学的にも興味深い。地方料理の宣伝にどの伝説をクローズアップしているのか検証するには、このように観光文化と伝承文学との関係性から紐解くこともできる。

### 3.2 オーストリアの梨の木信仰と梨酒

ヨーロッパの民間信仰では梨は女性性をあらわし、豊かな梨の実の収穫は「たくさんの娘が生まれること」<sup>15</sup>を象徴している。そして、オーストリアの梨の木にはこんな伝承がある。ザルツブルク近くのヴァルザーフェルトと呼ばれる野原に梨の古木があり、その木が再び芽吹いた時、善き人々に悪人たちが打ち滅ぼされる<sup>16</sup>。ヴァルザーフェルトはカール大帝が死後眠っているウンスターベルク近郊の地で、カール大帝と所縁が深い。梨の生命力の強さを示す「古木の復活」伝説は、ドイツ人にとって神聖な樹木<sup>17</sup>として梨が信仰される理由にもなっていた。

オーストリアのモストフィアテルと呼ばれる地域は、モスト **Most** (=果実酒) の名産地として知られている。樹齢 300 年をこえる梨の木をはじめ 10 万本から収穫される梨の実はリンゴ酒 (シードル) のような生産方法で梨酒になる。ワインのために果実が収穫される葡萄の寿命は一般的には 50-60 年ほど、シードルの原料であるりんごの樹齢は 15-20 年ほどが平均的で、これだけの生産性を保つ梨の木の寿命は他の樹木と比べても圧倒的に長い。この梨の木の生命力の強さ、梨の実の薬用効果は特筆すべきものである。

西洋梨 *Birne* には利尿作用、整腸作用、高血圧緩和などの薬用効果がある。中世の修道院では西洋梨を偏頭痛の薬、肝臓の薬<sup>18</sup>としても利用していた。ヨーロッパにおいて、食事のメニューとしても養生食の材料としても、西洋梨はりんごとよく似た利用<sup>19</sup>のされ方をしている。民間伝承における象徴としての意味についても、梨はりんごと同じく聖母マリアと関連が深い果物とされている。オーストリア政府観光局では、梨酒 (梨シードルという

---

<sup>15</sup> Manfred Lurker : *Wörterbuch der Symbolik*. Stuttgart, 1991, S.99.

<sup>16</sup> Leander Petzoldt : *Sagen aus Österreich*. Wiesbaden, 2007, S.23.

*Deutsche Sagen*, S.56.に同じ伝説が収録されている。

<sup>17</sup> Maximilian Moser, Erwin Thoma : *Die sanfte Medizin der Bäume. Gesund leben mit altem und neuem Wissen*. München, 2018, S.69ff.

<sup>18</sup> 野田浩資『中世の聖女ヒルデガルトの薬草学を紐解くドイツ修道院のハーブ料理』誠文堂新光社、2016年、p.28、p.132参照。

<sup>19</sup> 野田浩資前掲書、p.132のメニューでは西洋梨の代わりにりんごを使用できるとレシピに書かれている。

呼称が使用されている) 20の紹介に、梨にまつわる伝承を直接的には載せていないが、オーストリア国内で生産されている梨の木の樹齢、歴史の長さ、由緒が強調され、この地の名産品として PR されている。観光地の特産品として観光客が喜ぶのは、その土地でしか食べられない味といった側面以外に、その地域に根付いている歴史の深さが感じられるものがあげられる。オーストリアの梨酒は、この地の養生食に利用されていた食材であり、伝承文学や食文化との関連も深いメニューである。

### 3.3 オーストリア聖カトライン教会の「目を癒す泉」

オーストリア政府観光局の「保養とウェルネス」のトピックにおいて、ウェルネスツーリズムと伝承・迷信の結びつきが明確にしめされている観光地が、聖カトライン教会の「目を癒す泉」の項目である。

1492年ゴシック様式で建設された聖カトライン教会はオーストリアの南に位置するケルンテン州にある有名な温泉保養地バード・クラインキルヒハイムのシンボルです。

(略) 泉<sup>21</sup>Augenquelle から湧き出す温泉は 36 度あり、ラドンとラジウムが含まれています。この水で眼を洗うと視力が良くなったり、目の疲れを癒してくれます。昔からこの地の人々は、農作業や草刈りや太陽の明るさで眼が痛むと、この水で眼を潤したり、洗ったりして、気分を回復させてきました。<sup>22</sup>

つまり、この「目を癒す泉」はバード・クラインキルヒハイム付近で居住していた農民たちの間で治療地として共有され、その効果が今日まで伝わり、現在ウェルネスツーリズムのための名所として宣伝されているのだ。また、その治癒の対象となるのが、「農作業の際に生じた目の痛み」の緩和ということで、この地域の民間療法と農作物に従事する人々との関連性がうかがえる。

しかし、日本語版ページでは「目を癒す泉」が「保養とウェルネス」の主要項目として写真付きで紹介されているが、ドイツ語版ページでは主要項目にはなっていない点には注意すべきであろう。聖カトライン教会に関する紹介は、観光局以外では目の病を癒すための保養所とは掲載されていないため、本来この「目を癒す泉」というトピックは、迷信的な範疇の話としてとらえることが望ましい。少なくともその医学的根拠やその実例がここには詳しく掲載されてはいない。日本でも水の神や薬の神にまつわる神々を祀る神社では、名水にちなんだ縁起が語られているところがある。医学的根拠は当然示されていないが、観光地としてこれらの神社が宣伝される場合には、これらの名水の「効用」として、病気

---

<sup>20</sup> シードルとはりんごから作られた微発泡酒を意味するが、オーストリアでは類似の製法で梨から作られている。シードルが一般にはよく知られているため、オーストリア政府観光局の日本語版のページでは、ビルネモスト Binenmost (=梨酒) のことを「梨シードル」という訳語で紹介している。

<sup>21</sup> Augenquelle は「目の湧泉」と訳すべきであろうが、ここではオーストリア政府観光局の日本語ページの文章をそのまま引用した。

<sup>22</sup> オーストリア政府観光局「聖カトライン教会の目を癒す泉」<https://www.austria.info/jp/旅行先/地域/温泉・保養地/聖カトライン教会の目を癒す泉> (最終閲覧日 2020 年 2 月 10 日)

平癒、五穀豊穰、浄化などが語られている事例<sup>23</sup>は珍しくない。

バード・クラインキルヒハイムには、聖カトライン教会以外に正規の温泉施設を併設しているホテルやスパがある。「聖カトライン教会の泉」は一種の神話的シンボルであり、他の専門施設が保養所として推奨されている。バード・クラインキルヒハイムは<sup>24</sup>、ウィンタースポーツのための様々な設備、温泉療法をうけることのできる宿泊地、この地域の特産品から作られたジャムやハムなどの販売店、地方料理を楽しむことができる。目を癒す泉の伝承は、この地域のラドン温泉、ラジウム温泉<sup>25</sup>の古くからの活用を示す神話的な関心を惹く紹介文といえよう。

## IV ドイツ語圏の植物奇譚とスピリチュアルツーリズム

### 4.1 ヒルデスハイムの薔薇

薔薇 Rose はドイツ語圏の神話、伝説、メルヘンだけでなく、それ以外の地域にも神話的象徴として使用される植物である。ドイツの表象文化研究者であるマンフレート・ルルカー Manfred Lurker (1928- 1990) の『シンボル事典』 *Wörterbuch der Symbolik* の「薔薇」 Rose の項目には、薔薇の香り、美しさ、儂さが愛・死・楽園のイメージと結びついた<sup>26</sup>と説明されている。

グリム兄弟の『ドイツ伝説集』第 457 話目に「ヒルデスハイムの薔薇の茂み」の伝説が収録されている。この伝説で紹介されているのは、北ドイツ・ヒルデスハイムの聖マリア教会で咲き続ける薔薇の木<sup>27</sup>で、ドイツの人気観光名所のひとつである。ルルカーは薔薇の儂さの象徴性について論じているが、このヒルデスハイムの薔薇は、永い時を経て花が咲き続けるという不思議な伝承によって語り継がれている。

ルートヴィヒ敬虔王は、冬にヒルデスハイム近隣で狩りをしていた時、聖遺物を中に入れた十字架をなくしてしまった。王はその十字架を何よりも大切にしていた。王は従者に十字架を探すように命じた。そして、もしそれを見つかることができれば、その場所に礼拝堂を建てると誓った。従者たちが雪の上のこっている昨日の狩りの

---

<sup>23</sup> 大神神社の摂社である狭井神社は病氣平癒の由緒が語られる神社で、そのそばにある「薬井戸」と呼ばれる井戸でくめる水は、ご神水として万病に効くという伝承が名高い。

<http://oomiwa.or.jp/keidaimap/> (最終閲覧日 2020 年 3 月 1 日)

<sup>24</sup> <https://www.badkleinkirchheim.at/de/region-orte/bad-kleinkirchheim/> (最終閲覧日 2020 年 2 月 10 日)

<sup>25</sup> 日本では鳥取県東伯郡にある三朝温泉が公式ホームページでラジウム温泉の効用をうたっている。「三朝のお湯は、高濃度のラドンを含む世界屈指の放射能泉です。ラドンとは、ラジウムが分解されて生じる弱い放射線のこと。体に浴びると新陳代謝が活発になり、免疫力や自然治癒力が高まります。これが自慢の『ホルミシス効果』です。」と表記があり、現代の湯治の地として宣伝している。三朝温泉公式サイト <https://spa-misasa.jp/radium/> (最終閲覧日 2020 年 2 月 10 日)

<sup>26</sup> Manfred Lurker, S.630.

<sup>27</sup> ドイツ観光局「ヒルデスハイムの聖マリア教会」

<https://www.germany.travel/de/freizeit-erholung/spirituelles-reisen/mariendom.html> (最終閲覧日：2020 年 3 月 4 日)



跡をたどって行くと、やがて遠くの森の中で、緑なす芝生と野薔薇の茂みが見えた。彼らがそこに近寄っていくと、なくした十字架がそこにぶら下がっていた。<sup>28</sup>

その後、ルートヴィヒ敬虔王は自らの誓いを守り、十字架が掛かっていた薔薇の茂みのあった場所に礼拝堂を建立した。この薔薇の伝承には不思議が 3 つある。①失くしたはずの十字架が薔薇の枝で見つかったこと、②雪が積もるほどの冬の出来事であるにもかかわらず、十字架のあった場所は芝生も薔薇の葉も緑であったこと、③ルートヴィヒ敬虔王の在位は 814-840 年で、この出来事があったのは約 1200 年前である。薔薇の樹齢から考えて現代までヒルデスハイムの薔薇が絶えていないのは奇跡的である。

他にドイツ語圏で薔薇<sup>29</sup>にちなんだ観光名所といえば、「いばら姫」(KHM 50)<sup>30</sup>の舞台となったザバブルグ城がある。現在古城を改修したホテルとして宿泊施設<sup>31</sup>になっており人気の観光地ではあるが、いばら姫は『グリム童話集』に収録された「メルヒェン」で、実在の場所との結びつきはそれほど強くない。一方、ヒルデスハイムの薔薇は「伝説」ジャンル<sup>32</sup>に属し、「伝説」の場合は「メルヒェン」とは異なり、実在の人物、実在の場所、実際に起こった事件などがベースとなっている。そのため、ヒルデスハイムの民間伝承はより事実に近い物語としての楽しみを観光客たちに与えている。

物語の読み手あるいは聞き手にとって、想像世界の美しい産物であるメルヒェンと、事実を伝える目的を持って語られる伝説とでは、味わいも変わってくる。伝説の場所が観光地化された場合の楽しみは、それが千年、数百年の時を経て、かつて生きた人々と同じ光景を見、同じ物を手にとってみられることであろう。「スピリチュアルツーリズム」という側面から考えれば、メルヒェンよりも伝説にちなんだ場所で、歴史的物語の生きた痕跡を目の当たりにできるという点で貴重な文化資源である。ヒルデスハイムの薔薇伝承の登場人物ルートヴィヒ敬虔王はカール大帝の息子で、ドイツ史においてよく知られている人物である。その彼がこの地に建立した聖マリア教会は観光客の人気を集めている。またこの

---

<sup>28</sup> *Deutsche Sagen*, S.512ff.

<sup>29</sup> 「いばら姫」*Dornröschen* に登場する薔薇は、野薔薇(野茨) *Dornrose* を指す。棘をたくさん持つ野薔薇は *Schlafapfel* (眠りリンゴ) の別名があり、その棘に刺された人物は永い眠りにつくという神話的言い伝えがある。Jacob Grimm: *Deutsche Mythologie*. Wiesbaden 2007, S. 880.

ヒルデスハイムの薔薇にまつわる別の伝承では、ルートヴィヒ敬虔王が狩りの際に道に迷い、薔薇の枝に聖マリアの聖遺物の入った十字架を掛け、そこから救いたまえと祈ったところ眠りに落ち、その後救出されたという話がのこっている。谷口幸男、福居和彦、福嶋正純『ヨーロッパの森から ドイツ民俗誌』NHK ブックス、1981 年、p.82 参照。

<sup>30</sup> Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Hrsg. von Heinz Rölleke. Stuttgart, 2001, S.257. 本論ではこの日本語訳『子どもと家庭のメルヒェン集』は慣行により、書名を『グリム童話集』と表記している。なお、KHM は書名の省略で、KHM の後に続く数字は『グリム童話集』の収録番号を示している。「いばら姫」は第 50 話目に収録されている。

<sup>31</sup> ヘッセン州公式ホームページ内にある観光地としてのザバブルグ城の紹介。  
<https://lbih.hessen.de/leistungen/burgen-und-schlösser> (最終閲覧日 2020 年 2 月 10 日)

<sup>32</sup> 神話、伝説、メルヒェンは「民間伝承」のジャンルに属しているが、伝説は「真実あるいは真実として語り継ぎたい」内容であるのに対して、メルヒェンは空想上の内容で、実在のものとの関連させない語りになっている。

薔薇が第二次世界大戦で焼失した後に、枯れ枝から再び芽吹き今に至っている<sup>33</sup>ことも神話的である。

## 4.2 ツァイテルモースと苔族

『ドイツ伝説集』第46話目に「ツァイテルモース」という伝説が収録されている。非常に短い話のため、ここで全文を紹介する。

ヴンジーデルとヴァイスシュタットの間にあるフィヒテベルク山には、ツァイテルモースと呼ばれている大きな森がある。その森のそばには大きな池があった。このあたりには、たくさんのこびとや山の精霊が棲みついている。昔、ある男が夜遅くに馬で森を通りぬけたが、その時に2人の子どもが並んで座っているのを見た。男は子どもたちに、遅くまでグズグズせずに家に帰れと注意した。しかし、この子たちは、けたたましく笑いだしてしまった。その男は馬を進めたが、またその先でこの子らと出くわした。2人はまた笑った。<sup>34</sup>

この2人の子どもは当然ふつうの人間ではなく、ツァイテルモースを棲家とする妖魔の一種である。このツァイテルモースは現在EUの自然動植物生息保護地域<sup>35</sup>になっている。貴重な動植物の生息地であるツァイテルモースは、ドイツの自然公園に指定されているフィヒテベルグ<sup>36</sup>に含まれており、ハイキングなどが楽しめる景勝地<sup>37</sup>である。

ツァイテルモースのあるヴンジーデルには巨岩群もあり、この近郊では鉾山に棲む山こびとの伝説、ツァイテルモースの湿地帯に棲む苔族 **Moosleute** と呼ばれるこびとの伝説など、小さな人型の怪異体の目撃譚<sup>38</sup>がのこされている。苔族は水気の多い雑木林の蔭、荒野の草陰、穴の中をめぐらし、身体は緑色の苔に覆われている。同じく雑木林を動き回る狩魔王と呼ばれる彷徨える狩人は、苔族を惨たらしく食べ漁るため、通りかかった農夫たちが苔族の遺体を目撃することがあったという。ツァイテルモースはそれほど人が頻繁に踏み入れる場所ではなかったことから、貴重な動植物が現代にまで残されている。中世以前の森、湿地帯の景勝が守られているのは、恐ろしい伝説によって人々があまり手を加えなかったことも、その一因である。

---

<sup>33</sup> 『地球の歩き方 ドイツ 2019-2020年版』ダイヤモンド社、2019年、p.484。

<sup>34</sup> *Deutsche Sagen*, S.78.

<sup>35</sup> 「アウトドアアクティブ（ドイツ版）」に掲載されているツァイテルモースの紹介 <https://www.outdooractive.com/de/>（最終閲覧日 2020年2月25日）

<sup>36</sup> 伝説テキスト中のフィヒテベルク山と同じ。

<sup>37</sup> ドイツ観光局「自然公園フィヒテベルグ」の紹介ページ

<https://www.germany.travel/de/freizeit-erholung/naturlandschaften/naturparke/naturpark-fichtelgebirge.html>（最終閲覧日：2020年3月4日）

<sup>38</sup> 説話伝承分野において、奇妙な出来事を「怪異」と呼ぶが、その原因となっている精霊、鬼、妖怪、幽霊などの総称は統一されていない。そのため本稿では、怪異を引き起こすもの、不気味な存在すべてを「怪異体」という造語で呼ぶ。

### 4.3 春を告げるペルヒタ

植物に生命力を与える女神ペルヒタは、オーストリアだけでなく、ドイツを含む各地で伝承が語られている。『ドイツ伝説集』の第 268 話目「荒れ狂ったベルタがやって来る」には、ペルヒタが家庭や農村を駆け抜けてやってくる様子が描かれている。ペルヒタは特定の場所に留まるタイプの神ではなく、訪問神（来訪神）としての特性をそなえている。オーストリア政府観光局のホームページに、ペルヒタを「西洋のなまはげ」と解説しているのは、訪問神であることが関係している。ここで紹介するペルヒタ伝説には、ドイツ語圏におけるペルヒタの複数の別名も挙げられている。

シュヴァーベン、フランケン、テューリンゲン地方では、強情っばりの子どもには「口を閉じなさい！ そうしないと、荒れ狂ったベルタがやって来るよ！」と大声で言う。ペルヒタはその他にビルダベルタ、ヒルダベルタ、厳しいベルタとも呼ばれる。<sup>39</sup>

ペルヒタは先に述べたように穀霊・穀物霊 *Korndämon* の一種で、「穀物畑を吹き抜ける風 *Wind im Korn*」を見て、穀物霊が駆け抜けたと解釈されることがある。そのため穀物霊はそれを先導する神的存在とそれに追従する精霊たちや妖魔たちが一群となっていると考えられていた。ペルヒタ伝承でも、ペルヒタは単独で行動する場合もあるが、従者をしたがえていることが多い。ドイツの民俗学者レアンダー・ペッツォルト *Leander Petzoldt* の『デーモンと自然精霊の小事典 *Kleines Lexikon der Dämonen und Elementargeister*』<sup>40</sup>では、*Korndämon* は①植物あるいは穀物畑に出現する生長霊 *Vegerarionsdämon* の総称、②人間のような外見（男性型と女性型）、もしくは動物の姿をとる、としている。

ペルヒタは民家にやってくることがあり、その際に穀物で作った粥や団子と魚（とくにニシン）を食べる風習<sup>41</sup>がある。ニシンはドイツ語圏では、その卵であるカズノコを冬至に食べて新年を祝うが、それは「カズノコの無数の卵粒を生まれ出でる魂と考えるためである。ニシンは病気の万能薬としても用いられた。」<sup>42</sup>という。五穀豊穰、子孫繁栄の象徴であるペルヒタは、たくさんの妖魔を率いる恐ろしい神として、あるいは美しい女性の幽霊、老婆姿の妖怪としてイメージされ、ドイツ語圏の祭りの中にその姿をとどめている。

## V おわりに

本論では、食文化、食養生、自然療法の観点からドイツ語圏の観光地と伝説の関係性について事例を紹介してきた。「スピリチュアルツーリズム」の場として紹介される宗教的観光地と「ウェルネスツーリズム」の場に含まれる自然療法（植物療法）施設として「聖カトライン教会の泉」について述べた。宗教的施設と植物奇譚が関係する観光地には「ヒル

<sup>39</sup> *Deutsche Sagen*, S.303.

<sup>40</sup> *Leander Petzoldt: Kleines Lexikon der Dämonen und Elementargeister*, München, 2003, S.112.

<sup>41</sup> 『ドイツ伝説集』第 267 話・268 話参照。

<sup>42</sup> 下宮忠男『ドイツ・ゲルマン文献学小事典』同学社、1995 年、p.203.

デスハイムの薔薇伝承」を、食養生と観光食文化に活用される植物には、「ペルヒタ伝説」にまつわる地方祭りや食文化、オーストリアの「梨の古木」と地方料理「マウルタッシェン」の例をあげた。そして、自然保護地「ツァイテルモース」では、現代に至るまでその地に人があまり手を加えていない自然湿地帯とその背景にある伝説について明らかにした。

『グリム童話集』で広くドイツ国内外に知られているメルヒェンとは異なり、『ドイツ伝説集』やその他の地方伝説はドイツ語圏周辺でも知られているものはそれほど多くはない。しかし、その観光地や名物の由緒を伝えるものとして、観光宣伝文の中に活用されているものがあつた。著名な伝承は観光への関心を惹く材料のひとつとして、そしてその地で初めて知ることのできる昔話については、観光地での新たな学びとして、いずれも観光文化資源としての価値が見出せるものと思われる。

今回は一般の観光客が情報を得やすい事例を挙げるため、インターネット上で公開されているドイツ観光局とオーストリア政府観光局の公式ホームページを参照した。日本語ページも用意されているが、ドイツ語ページと英語ページしかなく日本語になっていないものもあり、今後は日本語ページが増えることによって、日本からの観光客の関心がドイツ語圏の文化へとより広がることを望ましい。観光文化学と伝承文学の関連研究を継続して今後の課題としたい。

## 謝辞

本研究は JSPS 科研費 18K00451 および 18K00506 の助成を受けたものです。

## 参考文献

- Brüder Grimm : *Deutsche Sagen*. Nachdruck der 1. Auflage 1816 und 1818. Hrsg. von Heinz Rölleke. Frankfurt a.M. 1994.
- Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Ausgabe letzter Hand mit den Originalanmerkungen der Brüder Grimm. Hrsg. von Heinz Rölleke. Stuttgart 2001.
- Leander Petzoldt: *Kleines Lexikon der Dämonen und Elementargeister*, München 1990, 4. Auflage, 2013.
- Leander Petzoldt : *Sagen aus Österreich*. Wiesbaden, 2007.
- Manfred Lurker : *Wörterbuch der Symbolik*. Stuttgart, 1991.
- Maximilian Moser, Erwin Thoma : *Die sanfte Medizin der Bäume. Gesund leben mit altem und neuem Wissen*. München, 201
- Jacob Grimm: *Deutsche Mythologie*. Wiesbaden, 2007.
- 池田一城「聖地の観光地化とマス・ツーリズム—高野山における交通の発達に伴う聖地空間の再編と役割の変化」、『観光研究』(Vol. 26・No. 2)、日本観光研究学会、2015年3月。
- 桜沢正勝・鍛冶哲郎訳『グリム ドイツ伝説集』(下巻)人文書院、1990年。
- 下宮忠男『ドイツ・ゲルマン文献学小事典』同学社、1995年。
- 谷口幸男、福居和彦、福嶋正純『ヨーロッパの森から ドイツ民俗誌』NHK ブックス、1981

年。

- 野田浩資『中世の聖女ヒルデガルトの薬草学を紐解くドイツ修道院のハーブ料理』誠文堂新光社、2016年。
- 『地球の歩き方 ドイツ 2019-2020年版』ダイヤモンド社、2019年。
- ドイツ観光局公式ホームページ <https://www.germany.travel/jp/index.html>
- オーストリア政府観光局公式ホームページ <https://www.austria.info/jp>
- ヘッセン州公式ホームページ <https://www.hessen.de>
- アウトドアアクティヴドイツ版 <https://www.outdooractive.com/de/>